
未来からの調査員

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来からの調査員

【Nコード】

N7232H

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

サラリーマン磯崎源五郎の前に突然現れた不審者が語った物語は、想像を絶する異様なものだった。やがて、彼はある要求を源五郎に提案してきた。果たして要求を受け入れるべきなのだろうか？

全知全能の神がこの世に存在しないことは、数学で厳密に証明できるらしい。とかく人間は、未来予知という途方もなく非現実的な能力に、畏敬の念を常に抱き続けてきた。しかし、仮に百歩譲って、この予知能力というものが存在したとして、それを手に入れることができたとしても、この世の中は結果的に予知しなかった方がよかつたであろうことも、間々あるものなのだ。これは、知らなかつた方がよかつたことを知ってしまった、哀れな男の物語である。

真つ暗なオフィスにはスタンドライトがポツンと灯っていた。そして男が一人、黙々と書類を書いていた。彼の名は磯崎源五郎。極めて平凡なサラリーマンに過ぎない。時刻は午後十時を過ぎていた。もちろんオフィスには誰も残っていない。

突然、源五郎は背後に異様な気配を感じ取った。振り返ると、戸口に見知らぬ男が立っていた。

二メートルもあろうかという針金のようなシルエツトが、薄暗いスタンドライトの灯りにゆらりと浮かび上がった。それは、蒼ざめた顔をした若い男だつた。油脂で固められた彼の黒髪は、はりねずみのようにとげとげしく逆立っていた。

「磯崎源五郎さんですよ。僕はアマチ・ルークと申します。決して怪しい者ではありませんから、どうぞご安心ください」薄ら笑みを浮かべながら、その不審者は不敵にも、ゆっくりと近づいてきた。源五郎は素早い動きで壁に設置されたスイッチを押した。ところが何の警報音も鳴らなかつた。

「その警備装置は先ほど解除させていただきました」何食わぬ顔で若い男がいった。

源五郎は不審者を睨みつけた。「どうして私の名前を知っている？ それより、どうやってここに侵入したんだ？ このビルは、建

物はボロイが警備は完璧だ。警備員数名が常時待機しているし、ところどころには赤外線感知器も設置されている」

「さあ、どうしてでしょうね……」青年は困惑している源五郎の顔をつれしそつに見つめていた。「まあとにかく、僕の話聞いてください。きつと、あなたにとって損にはなりませんから」そういうと不審者は床にどつかとあぐらを掻いた。

「損にならないとね……。まあいいだろう。少しでも妙な真似を試みる。大声で警備員を呼ぶことになるからな」

とりあえず脅しを入れておいて、源五郎も椅子に腰掛けた。その間青年は楽しそつに周りをキョロキョロ見回していたが、やがて源五郎に向かって口を開いた。

「実はですね、僕は未来の人間なんです」

「未来？」

「はい。西暦二二三五年、つまり二十三世紀の未来から、この二十一世紀に時間をまたいでやってきました」

「おいおい、勘弁してくれよ。二十一世紀の科学の全てを結集したつて、タイムマシンなんて代物できっこないだろう！」源五郎はせせら笑った。

「でも、二十三世紀なら可能かもしれませんよね」青年は笑みを浮かべながらいった。「実際、僕はこのセキュリティシステムを突破したのではなく、たった今ここに現れただけなんです。もちろん、あなたがここに一人でお仕事をなさっていることは、事前に把握してましたけどね」

「ここに現れたただけだと？」

「ぼかんと口を開けたままの源五郎を尻目に、青年は驚くべき話を続けた。

「僕は未来のとある組織から派遣されてきました。組織名は『時間移動に関する倫理機関』、通称MOTT、と申します。MOTTは、時間を移動する際に生ずる様々なトラブルの対策や規制を考案するために、未来の先進十四力国が協力して設立した国際組織です」

「そんな組織は聞いたこともないぞ……」思わず口走った源五郎だが、全くナンセンスな発言であると気づいて顔をしかめた。

「実を申しますと、我々は事前に、あなたという人物を徹底的に調査いたしました。あなたは稀に見る柔軟な発想をお持ちで、徹底した合理主義者でいらつしやる。我々の目的達成のために、さらには全人類の未来を開拓するために必要不可欠なたった一人の逸材、それが源五郎さん、あなたなのです！」

なぜ未来の組織が自分を必要としているのだろうか？ 正直なところ、この時点で源五郎は途方に暮れていた。

ルークは再び話題を戻した。「先程申し上げました『時間移動』とは、過去や未来の任意の時刻に人や物品を転送する技術の総称です。さて、その時間移動ですが、僕たちの歴史では西暦二一一年にロシアのマルタン・ザホロフという人物が人類史上初めて成功したとされております」

「随分ややこしい回したね。成功したとされているだつて？」
「つまりその……、真実がはっきりと確認できないのです。ある日突然、ザホロフは痕跡を残さずいなくなっていました。当初この事件は単なる失踪事件として処理されました。やがて、彼の私室に残された膨大な研究資料が公開されました。その内容は時間移動に関するものでした。それは非常に優れた論文でありました。各国を代表する有能な科学者たちは飛びついて研究をはじめました。すると、その中の一人が時間移動を実際に実現させてしまったんです。ザホロフの研究はこうして日の目を見ました」

ここで一瞬、ルークは言葉を詰まらせた。「ただここまでがいわゆる研究の暗黒時代でして、わかっているだけで十二人の希代の科学者たちが、実験中に誤って時空の塵と化しています。つまり、失踪してしまっただけです。おそらく彼らは時空のどこかで帰還できずにいるのか、あるいはその力オスの中で息絶えてしまったと推測されます」

我々は今日ふぐを美味しく食しているが、その安全な調理法を発見するまでに多くの人々が命を落としているはずなのだ。何事においても新しい真理が確立するまでに多数の殉教者が出ることは宿命ということなのだろう、と源五郎は解釈した。

「ザホロフの実験を再現したのは、アビス・エボケアというチエコの天才でした。彼は人類史上初めて、時間移動の旅路からの帰還を果たしたのです」

「時間移動から帰還できたという、はっきりとした証拠があったのかね？」たまらず源五郎が問いかけると、

「そうですね、少し説明がいきますよね。まず、エボケア博士は西暦二一五一年の十二月二日に失踪しています。それから二十七年後の西暦二一七八年の五月一九日に、彼は再び元の場所に戻ってきました」ルークが説明した。

「たったそれだけ？ ひよつとしたら、そのなんとか博士は、どこかに身を潜めていて、二十七年経ってからひよつこりと現れただけじゃないのか？」

「ところが、実に驚くべきことなのですが、世界の暦では二十七年もの歳月が経っているにもかかわらず、博士の帰還時の肉体年齢は出発時とほとんど同じだった。つまり、実際に旅行をしている時間分しか歳を取っていなかったんです」

「失踪した博士と、帰還した博士が同一人物とは限らんだろう？」

「実は両者のDNAが完全に一致したのです」

「ということは時間移動の旅路から帰還できたということか」源五郎は渋々納得した。

さらに、ルークは続けた。「時が経つとともに時間移動の成功率は確実に上がりました。やがて、時空の狭間に落ちて帰還できなくなるという初歩的なミスはほとんどなくなりました。当初、この研究は専門家の間で行われているだけで、一般庶民には公開されませんでした。安全性が高まるうちに誰もが関心を持つようになりました。かつて、宇宙空間への旅行を民間人が要望して許可されたよ

うに、時間移動の旅行を夢見る民間人が少しずつ増えていったんです。そんなとき、極秘研究の時間移動の技術を、内部の何者かがネット上に流してしまったのです。当然ながら、それを見た世界中の民間団体は一齐に時空移動の研究を試みました。やがて、ある民間会社が時空移動装置の開発に成功したという噂が流れました。時空移動の解禁を求める運動は日に日に増す一方です。僕が出発した西暦二二二五年にもなると、各国政府は民間への時間移動の実用許可をいつ解禁するのかを議論しはじめていました」

「技術進歩による当然の流れだね」源五郎がいった。

「意地が悪いですね。あなたは、もう、気づいているのでしょうか？ 不特定多数の庶民が好き勝手に時間移動を行う。それって極めて危険なことなのです。タイムトラベラーのちよつとした悪戯が、その後の歴史を大きく狂わせるかもしれないからです」

「そりゃあ、うっかり過去の人物を殺しちゃうと、その子孫が消滅するかもしれないよな」源五郎はSF小説で似たようなストーリーを読んだ記憶があった。

「おっしゃるとおりです。例えば、過去にさかのぼって幼少のナポレオンを殺してしまえば、欧州の歴史が根底からひっくり返ります」

「時間移動を民間に解禁するということは、タイムトラベラーたちが過去を故意に破壊することまでも想定しなければならぬんだね。彼らが歴史を壊さないようにするためには、法律による規制が必要となる。そして、その法律を考案する組織こそが、君たちの『時間移動に関する倫理機関』というわけだ」

一瞬にして問題を把握した源五郎に、ルークはにつこりと頷いた。

「そのとおりです。時間移動で引き起こされる様々なトラブルを事前に予測して、その対策を審議しようということが僕たちの目的です。最終目標は民間人への利用規定および法律の制定なのですが、第一段階としては、『未来から何らかのコンタクトを被った過去の歴史がその後どのように進展するのか』を調査することです。そもそもそれがわからなければ、いかなる対策も立てようがないですか

らね」ルークはにっこりと微笑んだ。

「さてと、お互いの信頼も深まったことですし、そろそろ本題に入らせていただきたいですが」

今までとはうって変わってルークの声はテンションが高くなっていた。

「磯崎源五郎さん、あなたについては既に色々チェックさせていた
だいております。お歳は三十三歳と七ヶ月。磯崎遥さんという美しい奥さんとは、結婚して五年経つてます。お子さんはまだいらっしやいませんね」

どうやら源五郎の私生活は完璧に調べ尽くされているようであった。

「申し上げましたとおり、時間移動をして過去と接触すると、未来に何らかの影響を及ぼす危惧があります。ところが、どのくらいのコンタクトをしたときに、未来がどのくらい変化を受けるのかということに関して、これまでに事例は皆無でありまして何もわかっておりません。差し迫る解禁日を前に、一刻も早い調査の完了がMOTTに要請されています。すなわち、過去の人物 歴史上の重要度が極めて低い人物でなおかつ委員会の趣旨を理解できる聡明な人物に意図的に接触して、その接触によって後の歴史が辿るリアクションを詳しく観測する調査です」

その歴史的重要度が極めて低い聡明な人物というのは、どうやら自分のことらしい。顔をしかめながら、源五郎が反論した。

「もうすでに、君は私と会話をするというコンタクトを行った。しかしこれだけで、未来がそんなに化するものかね。仮に君の興味深い話を私が論文で発表しても、誰も現実の話だとは受け取らないだろうよ。今回のコンタクトで未来が大きく変わるなんて、少なくとも私には想像できないが……」

「そのとおりですね。この程度のコンタクトでは、歴史がそんなに劇的に変化することはないでしょう。僕たちはもっと踏み込んだコ

ンタクトをあなたと交したいと希望しています」

ルークの目が一瞬きらりと輝いた。

「すなわち、これからあなたに、ある『ささやかな情報』を提供したいのです!」

「情報だと?」激しい悪寒が源五郎の背筋を貫いた。

「源五郎さん、僕がこれから提供しようとしている情報は、間違はなくあなたにとって極めて有益なものです。しかしながら、MOTは人権を重んじる倫理機構の端くれですから、万が一お嫌であれば、あなたは権利として情報提供を拒否することができます。でも本音を言うと今回に関しては、この情報提供を是非お受けいただきたいですね。僕はこれまでに色々な過去の人物を探してきましたが、あなたのような完璧なサンプルは他にはいません」

ルークの気持ちもわからないではない。やっとのことで、時間移動を理解できる二十一世紀の人物に巡り会えたのだ。そのような人間は古今東西捜しても、さらにはいないだろう。ひよっとすると、源五郎ただ一人なのかもしれない。

源五郎はいった。「落ち着きなさい。話だけなら聞いてあげるから。君はさつき、私にとって重要な情報を提供するといったね」

「そうです。あなたに未来の情報をたっただけ、それもとびきり重要な情報です。つまり、それは、あなたの『死に関する情報』です!」

「私の死?」

「はい、もしあなたの了解がいただけるのなら、『あなたがどのようにしてこの世からお亡くなりになるのか』を教えてさしあげます」

全てが凍ってしまったかのような深い沈黙。その静寂を破るのは壁時計が時を刻む音だけだった。ルークの返答は、全くもって思いも寄らないものであった。もし、自分の死に様を前もって知ることができると、一体どうなってしまうだろう?　これが単なる占

いや予言などの無責任な見解であればさほど問題はないが、さにあらず、未来を熟知する人物による極めて信頼性の高い情報なのだ。「き、君は死の情報を提供するといったが、そんなことをして果たしてそのとおりに未来は進行するのだろうか？」源五郎が沈黙を破った。

「つまり、その……、君がもしここで私に死の情報を提供すれば、私は当然の行為として、その運命を回避すべく何らかの対策を取るに違いない。前もって危険がわかっているのだから。首尾よくいけば、私は予定の死を迎えなくて済むかもしれない。そうになると、未来そのものが変わってしまったことになる。君が事前に見た実際には実現しなかった未来が、ナンセンスになってしまっただ」

源五郎は努めて冷静さを振舞っていたが、手のひらは冷や汗でぐっしょり濡れており、顔からは血の気が失せていた。

「そうですね。結果がどうなるかは、実は僕にも皆目見当もつきません。そもそも、それこそが僕たちの調査の目的ですからね」

ルークの返事は案外そっけなかった。「果たして未来とは、はかなくも火花を放つ線香花火のごとく刻々と姿を変えていくものなのか、それとも、いかなる努力にもかかわらずシナリオ通りの運命を人間は辿ることになるのか？ ふふっ。まあ、僕が提供する情報を信じるも、ナンセンスだと解釈するも、それはあなたの自由ですけどね」

源五郎は迷っていた。当のルーク自身も未来がどうなるのかは確信がないのだ。仮に、ここでルークが認識している自分の死の内容を聞いておけば、少なくともその対策を取ることができる。うまく事が運べば死の回避もできるかもしれない。これだけならば好都合な話である。しかし、自分の死を知ったために精神崩壊を引き起こすという危険も大いにある。果たして俺はこの試練に耐えられるのだろうか？

ところで、ルークが宣告する死の情報とはいかなるものだろう。

このとき源五郎は予想される死のパターンを三種類に分類していた。

一つ目は必然の死。例えば不治の病などによる『回避不能な死』である。残念ながらこれは対策の取りようがない。もし、ルークの宣告する源五郎の死が、この必然の死であれば、もはや絶望以外の何も残らないであろう。

そして二つ目は、不慮の事故による突然の死。つまり、その死の瞬間までは健康な体調のままを迎える死である。ジヨギング中の心臓発作や、他人から殺害されるという場合もこの二つ目の死に分類すべきであろう。現実的に考えればこんなに無念な死は他にはないだが、前もって未来がわかっているとすればどうだ？ 状況は激変する。とにかくその死が起らないように気をつけてさえいれば、その死は確実に防ぐことができるのだ！ いうなれば、この死は『回避可能な死』ということになる。

そして、最後になるが、今までの分類には属さない三つ目の死として、自分の意思による死、すなわち自殺である。しかしながら、これは源五郎に関してはまったく心配の必要がない死である。

散々悩みぬいた末に源五郎は次の結論に到達した。そうだ。ルークの提供する死の情報が回避不能であれば、未来などというものは刻々と変化していくものと開き直る。また回避可能であれば、徹底してその死を回避すべく努力を払う。いずれにしても、ルークの情報提供自体が自分にとって不利益にはならないはずだ。

とうとう覚悟を決めた源五郎は目を閉じて叫んだ。「わかったよ。さあ、私が、いつ、どこで、どのような死を迎えるのか、教えてくれ！」

「申し訳ありませんが、今回の調査ではあなたに提供できる情報は死因のみでして、時期と場所についての報告は禁じられております。それでもかまいませんか？」

またしても、そっけないルークの返事だ。

「なぜだ？ どうせならすべてを教えた方が、君たちにとってもより有益なデータになるんじゃないか？」

「確かに仰せのとおりです。しかし、多くの人は自分の死の時刻・

場所・手段のすべてを同時に知ってしまったえば確実に精神錯乱を起こすことが、数少ないサンプルで……、失礼しました、実例で報告されています。MOTは国際倫理プロジェクトですから、たとえ過去の人物とはいえ、個人の健康を配慮しない軽率な行動は禁じられているのです」

理屈は最もだが、ここまで人を錯乱させておきながら、最後まで柔軟な対処をしてくれないところはさすがに公の機関である。

「仕方ない。じゃあ、死因だけでもいいから訊かせてくれ」

源五郎は努めて平静を装ったが、もちろん心中は穏やかではない。「では、申し上げます……」 やや、もったいぶってルークは語りだした。

「それは高速道路上での出来事でした。逆走して走ってきた対向車に、あなたの車は衝突を避けることができずに正面からぶつかってしまいます。そして、その事故のためにあなたは命を落とされます」
あつけにとられる源五郎。「高速道路での逆走だって？ そんなの全くの自殺行為じゃないか。しかもその暴走車に、自分が巻き込まれて命を落とすなんて……」

普段から安全運転を心がけている源五郎にとって、交通事故で死ぬことは想定外の結末であった。確かに、高速道路上で対向車に逆走されれば、こちらが気づいたところで衝突の回避は不可能であろう。お互いの相対速度は時速百キロメートルを遥かに超えている。もちろん即死だ。

源五郎はしばらく頭を抱え込んでいた。でも、待てよ……。冷静に考えればこれは希望通りの回避可能な死ではないか。つまり、自分が高速道路で運転しなければ、この事故は絶対に起こり得ないことになる。

なだめすかすように、ルークがいった。「高速道路を逆走するという事例は、僕たちの想像よりも遥かに頻度が高いそうですよ。例えば、何か考え事をしていてうっかり入り口を間違えたとか、笑い話のような行為が毎年数百件と報告されています。ましてや高齢化

社会の二十一世紀、たくさんの高齢者が車の運転にかかりますよね。彼らの中には少々痴呆が進んでしまった人も……」

ルークはさらに補足した。「あなたが巻き込まれた事故による死者は全部で二名でした。残念ながら全員が即死でした」

「そうか……。ところで対向車にはどんな方々が乗っていたんだ？ とつさに源五郎は問い返していた。確かに非は先方にあるのだろう。しかし、彼らも自分と共にこの世から消えてしまう運命なのだ。どんな人物なのか気になったのもしごく当然なことであった。

ところが、ルークは意外にも困惑した顔つきになっていた。慌て返した言葉は、今までとはうって変わって、全く呂律が回っていなかった。

「すっ、すみません、調子に乗ってうっかり口を滑らせてしまいました。僕たちの当初の計画では、あなたに知らせる事実は死因のみでありまして、その……。ただ今の発言はどうか忘れてください！ 必要以上の情報提供は『時間移動に関する倫理機構』の本来の調査目的からはずれてしまうのだろう。源五郎はルークが狼狽した理由を、そのように判断した。

「なるほど、君の情報は大いに参考になったよ。すなわち、今後何があるうとも私は高速道路には入らないであろう。高速道路上で運転をしなければ、万が一にも君の予言した事故に遭遇することはないからね」

ルークに向かって、源五郎がニヤリと笑った。

「正に、おっしゃるとおりですね」

そのとき、ルークも意味ありげな笑みを浮かべていた。

磯崎源五郎氏は、決意したとおり、高速道路での運転はその後一切しなかった。それは、現代社会を生きるサラリーマンにとっては過酷なものだった。特に会社の命令で急ぎの出張をする際は、深夜に家を出発して下道を走り通して目的地に向かわなければならなかった。しかし、どんなに辛くても命には換えられない。源五郎は頑

なに決意を貫き通し続けた。

ルークに情報を受けてから三年が経っていた。あれから、彼には会っていない。

その日は大変暑い日であった。恒例である社内のソフトボール大会が催された。めずらしくはしゃぎまくった源五郎は、緊急に企画された打ち上げ会にも、ためらいなく参加した。昼間から赤ら顔をしている源五郎に向かって同僚がいった。

「源さん、帰りは俺が送つてやるうか？」

「ああ、ありがとう。でもそれには及ばないよ、家内に迎えにきてもらうから」

午後一時にはじまった会が終了したのは四時過ぎだった。携帯で呼び出された妻が運転する車内で、磯崎源五郎氏はうとうと眠り込んでいた。街の中心地を縦断する帰路は、通常は家まで三十分程であったが、休日のこの時刻ともなるとさすがに混雑していた。

「ねえ、あなた、渋滞がひどいんだけど？」

相談のつもりだったが、助手席からの返事はなかった。幸せそうに寝息をたてている亭主を横目に、磯崎夫人はぼつりと独り言をつぶやいた。

「ちよつと勿体ないけど、仕方ないわね……」

市街地のメインストリートから、左手の小さな脇道へ向かって、磯崎遥はハンドルを切った。西日が照りつけるまぶしい直線道路を、タイヤの軋み音を響かせながら、車は軽快に加速していった。最後に夫人の視野に飛び込んできた光景は、普通車七百五十円と表示された都市高速道路の料金所だった。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7232h/>

未来からの調査員

2010年10月30日21時40分発行